文學士 新村 出 述

# 言語進歩論

東京專門學校出版部藏版

# イエスペルセン氏言語進歩論目次

序論……三
本論……一七
第一章　古今の諸國語……一七
第二章　原始の語法……三三
第三章　支那語の變遷と語序の發達……三九

目次畢

# イエスペルセン氏 言語進歩論序

原書は題してProgress in Languageといふ。著者が一八九一年、博士論文としてコッペンハーゲン大學に提出せる舊稿(本書の第七及第八章)に就きて大に增訂し、又更に數章を編入して、一書となし、一八九四年に公にしたるものなり。イエスペルセンJespersen氏は丁抹の人、今首府の大學に教授たり。言語學者としてよりは、寧ろ聲音學者として著はれ、英のスヰード、ロイト、佛のバシー、獨のフォーエトル等の諸氏と並び稱せらる。又近世語學者として北方の鎭たり。

案ずるに、言語學者に數多の學派あり。聲音學派あり、心理學派あり、博言學派あり、印歐語學派あり。著者は前記數氏と共にその第一派に屬するもの、而して印歐語學派乃至梵學派及び古典派と對峙して、近世語教授法の講究を以て、その標幟とす。されば本書の序論に於て、先づシュライヘルの言語退化論に矢を放ち、以て古語の過重を駁擊したるは、固より著者の本分たり。這般の消息を知らんと欲せば、所謂「近世語運動」の眞相に通ぜんことを要す。然れども、事は嘗て某誌(教育學術界三卷三及四に

略述したるあれば、今贅せず。

著者が立論の材料に供したる言語の種類は多しとなさず、從て稍、輕斷に流れたる嫌なきにあらずと雖も、言語優劣の標準を狀態の貧富及單複におくことの迷誤を破し、近代の歐洲語、殊に著者の母語たる丁抹語と、その姉妹語たる英語との價値を重うし、又語序の一定を以て、進歩せる言語の特徴となしゝが如き、印歐語學派に對する一打擊なるのみならず、又吾人をして痛快の感あらしむ。常に印歐語學の立脚地より、他の語族を論斷せんとする學者とは、固より同日の談にあらざるなり。この書、また我が古代の雅言を尊びて、現今の口語を卑俗し毀るの蒙を啓き、又支那語の言語學上の位置を紹介するを得べし。若しそれ、本論の獨創にして斬新なると否とは、今我が問ふを要せざる所。

本書の綱要には、成るべく耳遠き言語の例を採ることを避くべしと雖も、必要上南阿語の一二片と、僅少の近歐語とを擧げざるを得ず。その他、能ふ限り、和漢語より引證を以てせんことを期す。

明治三十四年十一月

新村出



# イエスペルセン氏 言語進歩論

文學士 新村出 述

## 序論

形態上印歐語古今の變——英語の簡略——複雜と簡單との優劣——シュライヘルの言語三分法——綜合語と分解語と——言語發達の三階段——言語退化論——上論の因、ヘーゲルの歴史哲學——その緒(一)、古典語の尊崇——その緒(二)、比較文典に於ける古語の價値——言語の優劣を評價する標準——近世分析語に對する諸大家の意見

印度日耳曼語比較文典は吾人に敎ふるに、古へのインド・エラニアン(印度語及波斯語)、アルメニアン、グリーク、アルバニアン、イタリック、ケルチック、ジャーマニック及びバルト・スラヴニック(ベルチック語及びスラヴニック語)の八派十國語は同一源語より分流したる方言の發達せるものなることを以てせり。吾人はこの八派の姉妹語を生みたる母語が、今より幾千年前に、何處に於て話されたるものなるかに就て、未だ正確なる智識を有せずと雖も、傳來の諸姉妹語の上に遺りたる姿を比較して、その母語

の面影を推定し、以て原語の構造を再建するとを得たり。この印歐原語は太古の形を最もよく保存すと稱せらるゝ梵語に於て見るを得べきが如く、曲折に富み、形態の變化複雜に、單語形成の方法井然として、亂れず、吾人をしてその構造の妙なるに驚嘆せしむるものあり。而して上述八分派の言語は、母語の原形の名殘を留むる度合に多少の差ありと雖も、各最古純粹なる姿に於ては、概ね豐富なる曲折を有したりき。然るに時代と共に言語は變遷し、單語形成法は紊亂し、複雜なる狀態は漸く簡單となり、豐富なる曲折は次第に減少して、近代の印歐諸國語は古代のそれと著しく相違するに至れり。就中變化の甚しきものを英語となす。試みに現代の英語がいかにその原形と異るかを見よ。フリードリッヒ・ミューラー云く、「古代の印歐諸國語に於ては、語根と語幹と語詞(單語)との區劃は極めて嚴なりき」と。然るに英語の man 又は wish の如き語詞は、今之を分離するに由なきにあらずや。又云く、「名詞(形容詞をも含む)と動詞との兩範疇は明かに相判別せらる」と。然るに、英語の man は通例名詞として用ゐらるれど、獨ほ man the ship(直譯、船に人する)の如く、之を動詞とし、又 my wish (我がねがひ)と I wish (我はねがふ)との別のやうに、同一語をさながら名詞にも動詞にも流用するにあらずや。又云く、「名詞は男、女、中の三姓のいづれかに屬す」と。今や英語は文法上の姓を有せざるにあらずや。又云く、「諸種の文法上論理上の範疇の區別は嚴守せらる」と。然るに英語には、名詞も、副詞も、共に形容詞として用ゐらるゝが如き場合あるにあらずや。

かくの如きは變化の大要のみ。然らば、吾人はかの複雜と、この簡略と、古への曲折と今の單立と孰れを以て優れたりとなすべきか。抑もかゝる變形は發達と名づくべきか、衰亡と名づくべきか。又成長と呼ぶべきか、頽廢と呼ぶべきか。思ふにこの問題は之を小にしては、英語は印歐原語に比して、その優劣如何てふ問題なりと雖も、之を大にしては、凡て言語は進歩するかの問題となり、その關係する所狹しとせず。即ち本書の論ぜんとするところ、實に爰に存す。

近時の言語學者が之に對する解答の意向の孰れにあるかは、固より言ふを要せざれども、今日なほ古風の謬見を懷ける學者なきにあらずと信ずるが故に、先づ三四十年の既往に遡りて、諸大家がいかに言語を分類し、さて英語をいかなる地位に列したるかを見んと欲す。

從來學者に由て試みられたる言語の分類法種々ありと雖も、今日最も廣く行はるゝものはアウグスト・シュライヘル August Schleicher(1821—1868)の制定にかゝる。爰に吾人はシュライヘルはヘーゲルの哲學の流を汲み、晩年ダーヰンの崇拜者たりしにも拘らず、なほ前説を固守して終に渝らざりし言語學者なることを忘る可らず。彼が言語の分類法はヰルヘルム・フォン・フンボルト Wilhelm von Humboldt(1767—1835)のそれに基きたるなれど、その故らにフンボルトの四分法を棄てゝ三分法を採りしが如きは、そのヘーゲル派たる本色をあらはしたるものなり。然らばシュライヘルの分類法は如何。

第一類　この類の言語にありては、意義は固より聲音を以て示され、以て語根を爲すと雖も、根義の諸變態、諸關係は、特に聲音を以て言ひあらはすことなく、一に語序(語詞の順序)に由れり。即ち內に語根變化し、或は外より語根に附着するものありて、各根義の諸關係を示すことなし。これ單綴語に於て見る所、即ち呼んで孤立語といふ。支那語等之に屬す。「我愛汝」「汝愛我」の如し。

第二類　この類の言語にありては、意義もその關係も共に或る聲音を以て表はさるれど、語根、即ち意義を示す聲音自らは內部に變化を起こすことなく、外部より別に附着するものありて、以て根義の諸關係を示す。即ち語根の前後若くは中へ、外より或る聲音添加せらる。わが手爾波及び助動詞の一部の如きもの是なり。然れども、この外的附加物と根語との結合の痕迹猶ほ明かにして、未だ渾一不可離の域に達せず。されば二者の相分割し得べきことなほ膠着したるものを分離し得べきが如し。由てこの類の言語を膠着語といふ。烏拉阿爾泰語等之に屬す。「小供が犬に菓子を與へた」の如し。

第三類　この類の言語にありては、語根と外的附着物とは、融合して渾一不可離となり、且つ語根自らも、內に變化し得て、意義の曲折自在なり。之を曲折語といふ。印歐語及びセミチック語之れに屬す。英語の不規則動詞の諸變化、名詞の複數の接尾辭sの如きは、古代の曲折の痕跡なり。

以上をシュライヘルの擧げたる三類の言語とす。最後の一類に屬する印歐語は古今によりて形態上大なる差別あり。古代の印歐語は、名詞の姓、格及び數に於て、又動詞の人稱、數、時、相及び法に於て各、一方には、外、一定の形の語尾を有すると共に、

他方には、內語根の母音變化して、內外兩ながら曲折を逞しうせり。かくの如き方法を以て、單語(名詞及ひ動詞)は構成せられ、根義のみを表はす屢音即ち語根は、さながら單語たることなく、殆どあらゆる場合に應じて、變化を極め、以て一語詞を成立す。故に單語の中には、實質(意義)をあらはす要素と、形式(關係)を示す要素とが、相抱擁して一躰に綜合せり。實辭と虛辭とが合躰して一語詞を形成せるなり。されば、この種の古代印歐語を名けて綜合語といふ。然るに音韻頹化をはじめ、言語變遷の諸作用は、この綜合語を侵して、語尾は漸々消滅すると同時に、其種の語尾と他某種の語尾とは形態を一にするに至り、又他方には如上の損失を補ふために、前置詞及び助動詞多く用ゐらるゝに至れり。是に於て單語構成法は瓦解して、嚮きには綜合的に根義とその關係とを一語もて現はしゝに、今や二者を分解して、之を二個(若くは二個以上)の單語にて分示せざるを得ざる場合生ぜり。實辭と虛辭とは、互に相分離して各一語詞を成せるなり。されば、この種の近世印歐語を呼びて分析語といふ。是に由て、印歐語今古の別は、やがて單複の別なり、離合の別なることを知るべし。分析語の通例は英語にあると上述の如し。例へば"John loves Mary."



"Mary loves John"の兩文に於て、主語も目的語も形態の區別なきこと、なほ「我愛汝」「汝愛我」の場合に似たらずや。而して意味の變化は、英漢共に語序に由るならずや。又 you are といひ they are といふ、共に二個の單語にて分示せられど、古代の綜合語にありては、各二個の要素は相融合して離れざりしなり。かくの如き分離乃至形態の無差別は果して印歐語の退歩なりと謂ふを得べきか。これ以下著者の論ぜんとする所、いでや先づシュライヘルの言語三等論の批判に移らむ。

シュライヘルの說に由れば、以上三類の言語は同時に共存するのみならず、順次に繼起し、言語發達の三階段を示すものなり。曲折語は發達の頂上に到着したる最高等の言語なり。即ち是に至りて、言語はその極致に達したるなり。而して言語が曲折の域に到りたるには、必ず孤立及び膠着の道程を經過したるに相違なし。然るに支那語は三千年前も現今も、依然として單綴たり。古代の拉丁語は、近世のローマンス語の如く曲折語の典型を具ふ。事實は前說と矛盾するもの丶如し。されど、シュライヘルはその辨解に苦しまざるなり。曰く、言語の形成と歷史の發展とは相繼いで起るものにして、歷史(記錄)の生ずるに至るや、言語の發達は爰に完結

す。言語は、その形成せられたる有史以前にありては、人類の智的活動力の目的たりしも、有史以後に於ては、その手段となり了れり。吾人は今現に發達の途にある言語、若くは爾來一層進歩したりてふ言語あるを知らず。歴史時代に入りては、言語はすべて零落せるのみと。

以上をシュライヘルの言語退化論の概要とす。これ「歴史は、人心がおのが自由を意識するに至りて、初めて生ず、而してこの意識や言語の完成したる後に起るものなり」といへるヘーゲルの説を承けたるに外ならず。而してシュライヘルはダーヰンの進化説を奉ずるに至りし後も、なほ主張して云へらく、「言語の起源及び發達は歴史以前に在り、歴史は只言語が所定の法則に從ひて老衰せる迹を示すに過ぎず、吾人の使用する語法は是れ老朽の遺物のみ」と。

かくの如き言語退化論は獨りシュライヘルのみならず、當時及先輩の諸言語學者に由て唱へられたるなり。又シュライヘルの論斷の根據は、之を師承の歴史哲學にのみ師せんは稍〻不當の感あり。何となれば一方には崇古主義の因襲既に久しきありて、古典科出身の學者は希臘乃至拉丁の言語構成法の複雜多岐なるを愛し、形態上、名詞に四五の格と三の姓とを有せず、動詞に數個の時と法とを備へざる歐洲近世の諸國語は完全なる國語にあらずとの念を懷きたれば、言語學者もこの潮流に卷込まるゝは蓋し自然の勢なればなり。されば彼等の眼には英語、丁抹語又は佛語の如き、文法簡單なる國語、さては支那語の如き孤立語は、その崇拜せる古典語に比していかばかり卑俗に映じたることぞ。何ぞ我國舊派の國語學者が中古文典を尊ぶ精神に似たるの甚しき。

之に加ふるに、他方には比較言語學が勝利を博したる所以は、古代の諸國語を比較したる結果に在るが故に、古語の過重はおのづから起らざるを得ず。印歐語の比較に要する所は、英獨語にあらずして、ゴシックにあり、佛伊語にあらずして拉丁にあり。碑文に遺り、聖典に存する太古の希臘、印度の國語を採るべくして、轉訛甚しき近代の波斯語は棄てざる可らず。これ固より當然のこと、而かも此比較研究法上の言語の材料としての價値は、直ちに之を言語其ものゝ價値に移す可からざるにあらずや。方法上の取捨と、價値上の優劣との混同、これ印歐語學家が古語尊崇の一緑なり。シュライヘルいへるあり、「我が獨逸語は、之をゴシック語と對照するに、な

ほ彫像の永く河流に輾轉して、その美しき四肢の磨滅し、今や滑かなる一石柱の存するありて、僅に原形を想像せしむるに過ぎざるに似たり」と。されどそが既に一旦美術品たる品位を失ひたりとせば、吾人は旋轉し難き、凹凸の石像を棄てゝ、平滑なる地轆轤を取るべきにあらずや。

シュライヘルは言語の優劣を評價する標準の何たるべきかに就ては、一言の説明をも與へざりき。その言語哲學上の主義は、言語の價値は、之を使用する社會の實際の利害に由て定まるものなるを認め得ざりしなり。その説に曰るに、言語は例へば植物などの如き自然物にして、人心の作用にあらざるなり。言語は社會の所生物にして、人文の程度に從ふものなることを認めざるなり。而して言語、既に物質なりとせば、言語學は無論自然科學ならざるを得ず。後年マクス・ミューラーが大に同論を唱道したるも、主としてシュライヘルの説を繼承誇張したるに止まる。

吾人は今シュライヘルに別れて、他の學者に聽かんか。ヰルヘルム・フォン・フンボルトは曰く、言語は所作物にあらずして、作用なり、人が他人をして自己を理解せしめんとする働きなりと。之に由て見るに、僅少の手段を以て夥多の用を成就し得る言語、即ち最も簡單なる機械を用ゐて、複雜なる多量の思想を現はし得る言語を以て最高等の言語とすべきや明かなり。何となれば、かゝる言語は自己を理解せしむる働きに富めばなり。

ラスク Rask(1787—1832)も、名詞及び動詞の活用語尾豐富にして、構成精緻を極めたる言語は多少の利益を有せざるにあらねど、語法の簡單なる利益は更に大なり、といへり。マドヰッヒ Madwig は極力近代語を揚げて云く、近世の分解語は古代の綜合語と同じく、思想を明晰に言表はし得るを以て共に優等の言語に屬す。語法上の形態に乏しきことは、言語の妨碍たる憂なし、と。さはれ吾人は前二家よりも更に一歩を進めて、語形いよいよ簡にして、その種類少ければ、言語はますます可なりと言はんと欲す。近世歐洲語の構成法の分解的なるは、古代の同語族の綜合的なるに比して優勝たること言を容れざるなり。吾人の見る所を以てすれば、古語の所謂豐富なる形態は美にあらずして醜なり。

吾人は次にヤコブ・グリム Jacob Grimm(1785—1863)が『言語起源論』(一八五一年)に於て述べたる適切なる言を引かむ。曰く、太初の言語は、その一部の調は好けれど、散漫

にして統一を缺く、近世の言語は、その美損じたれど、全躰の調和によりて之を補ひ、又その用ゐる手段は劣るも、結果は一層大なり、と。又曰く、人生の言語は一見退歩的なるが如しと雖も、そは或る特殊の點に於けるのみ。全躰としては、進歩的にして、その力絶えず增加す、と。かくてグリムは熱心に英語を賞揚してその論を結べり。之をシュライヘルが、英語は、歴史及び文學上重要なる國民の言語が、いかばかり迅速に沈淪するものなるかを示す好適例なり、と貶したるに比して、何等の對比ぞや。

倘ほ近年擡出せる學者の所說より言語進歩論に資すべき二三の辭を紹介して序論を終らむ。クロイテルKräuterは曰く、語形の頽廢は、佛語に於て見るが如く、文章の明晰と精緻とに伴ふ。又その頽廢が詩文の趣を害せざるとは、沙翁の言語を見て知るべし、と。蓋し、佛語は拉丁の下に立ち、アングロサキソン語は近代の英語の上に位する者に非ざるをいふなり。オストッフOstholfは曰く、吾人はレッシング及びゲーテと、古へのウルフヴラ（紀元第四世紀ノ四ゴス王國ノ僧正、聖書ノ譯者）又は、オットフリード（紀元第九世紀ノ獨逸詩人）のそれとの優劣を爭ふが如きことを避けざる可らず。一國語の音韻組織一絲亂れず、又其語源上、語詞の構造明瞭なるときは、深く人をして喜ばしむるものありと雖も、思想の委曲を十分に言表はし得るときは、この利益また彼れに讓らざるなり。物は見方に由る。建築家の見解と、その家の住者の見解とは相異る、と。最後にテグネルE. Tégnerは極言して曰く、曲折語は他の兩類の言語（膠着語及孤立語）よりも、根本的に劣等なり、これ曲折語は思想の自由を妨ぐればなり、と。

著者は爰に諸家の說の引用を止めん。之に由て讀者は、近時の大家が言語の進歩に對する意向の孰れにあるかを知られたりと思惟するが故に、之より本論に入りて、言語の歴史的發達を觀察せむとす。

# 本論

## 第一章　古今の諸國語

語形の長短――語形の多少――語詞構成法の不統一――百古を學ぶ難易――分立の綜合にまさる諸點――抽象と具象――印歐古語と南米及南阿の蠻語――姓及數を區別する不便――呼應法の贅物――本章の摘要

印歐古語の長き語形は、近世語に於て著しく短縮したること、既に述べたるが如し。今シュライヘルの擧げし英語のbadと、ゴシックのhabaidédeinaとの對照に由て、語形長短の得失を論ぜんに、誰か英語の短語形を取らざるべき。こはなほ同じ目的に達せんに、四里の道を去つて、一里の道に就くと異るなし。語詞は即ち發音諸機關の動作の結果、生じたる聲音より成るものなれば、語形の短小なるは、思想を傳達する時間を節し、勞力を省くものといふべきなり。たとへ英語の短語形に多少の不便ありとすとも、その不便はゴシックの長語形を用ゐたらんをりの不都合よりも少かるべし。

豈にたゞ捷徑と迂路との比のみならんや、英語のhadてふ單一なる語形は、ゴシックの十數個の語形に相當せり。即ち後者が同じ動詞の活用に於て、二三個の人稱と、單複の三數と、二個の法とによりて、各特殊の語形を有するに對して、前者は僅に一小語詞を以て足る。以て英語の學び易きことを知るべし。然るに非難するものは云く、英語にありては、語形は單一なりと雖も、別に之に人代名詞を加へざれば、古語における一動詞の職能をなさゞるにあらずや。されば此にありては、一個の長き單語を以て用を辨ずるに、彼にありては、二個の單語を以て、初めて同樣の務をなし得るが故に、得失の差相償ふにあらずや、と。論者の言ふ所、必ずしも然らず。何となれば、第一に、英語の人代名詞は、動詞のあらゆる時と、あらゆる法とに通じて一樣の形にて用ゐられると、古ゴシック語の動詞の人稱語尾は種々の時と法とに應じて、各特殊の形を具ふることあればなり。しかのみならず、第二に、ゴシック語は、人稱語尾以外に、之と形態相異る人代名詞を有し、而も彼と此との關係極めて薄し。然るに、英語の人代名詞は何處にありても、常に變らざるなり。況んや、かの人稱語尾の添加せる動詞(說明語)の、時として、更に人代名詞、若くは名詞(主語として)をすら取ることあるをや。是に於て人稱語尾は全く無用の長物なりといふべし。

印歐古語に於ける、語形の冗長なること、及び曲折語尾の冗多なることに就ては、上述の如し。之に加ふるに、語尾の形成法亦甚だ不規則なるが故に、それらの國語を記憶するは容易の業にあらざるなり。蓋し、かゝる不規則を來たしゝ所以のものは、曲折あるがためなるべけれど、元來曲折と不規則とは必ずしも常に相伴ふものにあらず。何となれば、かの人爲的に制定したる世界語(Volapük等)なるものゝ形態を見るに、その曲折法全く一樣にして、毫も變格なければなり。而も、こは理想的語法に於て、初めて見るを得べく、梵、希臘、拉丁、ゴシック等、古來實在せし諸曲折語に於ては、活用上變格を有せざるなし。近英語の文典に於て、名詞の詞法が、僅に數頁中に收めらるゝ所以は、一は格の少きに由ると雖も、一はその活用法簡單にして、名詞は概ね齊整に働き、亦格及び除外例極めて少數なるを以てなり。而して、近英語の特色は、獨りその語形の齊整なる點にあるのみならず、又その語形の用法、即ち文章法の、古語のそれに比して、甚だ簡潔にして、而も論理的なる點にありとす。換言すれば語形の構成法も、使用法も、兩ながら簡明なること、即ち單語を立つる方法、及

び單語を文章中に配置する方法、共に容易なることを以て英語の長所とす。されは一國語法が漸く齊整に進むときは、之を學び、之を話するものゝために、非常に便利を增すこと、吾人を俟たずして知るべし。

今試みに、複數の語形に就て、上述の理を明かにせん。例へば、拉丁語若くは近世の獨逸語と、近英語とをとりて、複數構成法の正變を比較せよ。獨逸語においては、gott が götter となり hand が hände となり vater が väter となり frau が frauen となるが如く、複數を構成する方法極めて煩はし。拉丁の複數曲折法、亦之に準ず。然るに近英語にありては、單數と複數との、形態上の區別は概してわかり易く、三尺の童子なほ之を能くすべし。比較を文字の論にとらんは、聊か不當の嫌なきにあらねど、我が漢字の讀み方の多樣なるは、印歐古法の語詞構成法の煩雜なるに似て、一層甚しきものと考へらるべきか。讀者は又我が中古の文章語に於ける動詞活用法と現代の口語のそれとを對照して、後者の大に變格を去つて、正格に就きしことを見らるゝならん。四種の變格中、奈行と良行とは四段活に同化せり。餘の二種は今日なほ變格たるを失はずと雖も、佐行變格は、或るものは、佐行四段に類推し、或るものは上二段に働けり。二段は上下共に、各一段に變化せり。かくの如き變遷は、亦國語法が不統一の域より、統一に進みしものと見るを得べからざるか。

かくの如く吾人が言語を學ぶ難易を論ずるに對して非難するものあり。云く、大人が外國語を學ぶに方りて遭遇する困難は、兒童がその母語を習ふ場合におけると同樣に見做すを得ず。異國人が學びがたしとする語法も、案外容易に、本國の兒童は之に熟達するものにして、綜合語たると、分解語たるとに論なく、本國人はさまでの苦勞を感ずるものにあらず、と。然れども、この非難や一を知つて二を知らざるもの。先づ兒童が母語を學ぶ階段を見るに、論者がいふ如く、過失もなくすらすらと進歩するものにあらずして、その熟練するに至る迄の勞力は蓋し少からざるなり。活用をあやまり、類推を違ふることは勿論、語意の不當、手爾波の相違、語序の錯雜等、普通の慣用に背くこと、甚だ多し。たとへ周圍の同國民より、常に同國語を耳にして、語法を習ふべき場合、矯正せらるべき場合多きにもせよ、多少の勞力なき能はず。而してこの勞力は構成繁雜なる國語におけると、語法簡單なる國語におけると、孰れか大なるべき。尤も古人が幼時ゴシック又はアンダロサキソンを學

びしをりと、今日英國の兒童が英語を學ぶをりとの難易の差を、實證することは、到底能ふべからざることなれど、今の容易にして、昔の困難なりしことは、吾人の想像し得べき所ならずや。

言語を正しく使用することは、初めて學ぶ階段に於て困難なるのみならず、既に熟達したる後に於ても、その勞力や少しとせざるなり。平生話す際には、その勞を意識せずと雖も、無意識なるを以て、直ちに勞力なしと斷ずるは不可なり。その反證には、若し他に氣を奪はれて、心こゝに在らざるときは、平時に異りて、語法を誤り、句法を紊り、發音を違ふること甚だしきを以て、勞力の皆無ならざるを知るべし。話さんとする事柄そのことに通ぜざるときは、往々吾人の心力は思想の整頓の方に費されて、文法を顧み、又は流暢に話す餘裕なきに至り、その際において、初めて、言語を使用する勞力の存することを自覺すべし。則ち、所謂「口が廻らぬ」ことに心付くなり。なほ琴の名手が指端に妙音を弄して、何等の勞を覺えざるは、これ熟達の結果、指頭機械的に動くがためにして、勞の全く無きにあらざるが故に、若し思ひ琴の上になきに方りては、手おのづから澁るを感ずるが如し。

吾人は母語を學び、又は話す勞力の、決して小なるものにあらざるを論じ、その勞力は複雜なる國語ほど大なるべきを暗示して、以て非難者に答へたれば、之より本題たる古今諸國語の優劣論にかへらんとす。

分解語が綜合語にまさる點種々あり。其一は、任意に一章句中の或る要素を強め、以て思想の精緻を示し得ることにあり。拉丁語のCantaveramと、之に相當する英語のI had sungとについて論ぜんに、前者は後者が三個の單語を以てあらはせる三種の要素を一躰に合せたり。今、通俗に之を解釋すれば、「うた」、「ふ」、「てふ」動作、即ちこの一語の根義はcantaにあり、この動作の時をあらはす要素は主としてveraにあり、この動作を起す者(人稱)は主としてmにあり。この三要素相綜合して一語を形成す。されば英語のI(吾)は、大躰、この拉丁語の最後の部分にあたり、助動詞hadは、その中部にあたり、sungはその前部にあたると、假定せらるべし。さて分解語が綜合語にまさる二三の點を述ぶれば、先づ、(一)かく分解せられたる三語より成る一文章を話すとき、吾人は音勢(ストレッス アクセント)を三要素中のいづれにも置き得る自由あり。「吾」の意を強めんと欲せば、その語に強勢をおくを得べく、時を強く言ひあらはさんとするとき、又はい

かなる動作なるかを強めんとするときは、それぞれの語を強く發音するを得。I had sungといへば「うたふ」意を強め、I had sungといへば、時の意を強む。拉丁語においても、果してかくの如き方法によりて、cantaveram といひ、cantaverim といひて、區別したりや否や、今斷言しかぬれども、若し人稱の要素を明かにせんと欲せば、別にegoてふ人代名詞を持來らざる可らず。この點に於て、英語の便利なるを應すべし。次に、

(二)一語に合躰せるときは、三個の成分の順序を變更すること能はざるは、勿論なれど、三個の語詞に分れたるときは、或る場合には(慣用の許すかぎり)異なる順序に配列することを得べし。最後に、(三)例へば「誰がうたひしか」との問に對しては"I had"と答へ、「汝は何をなしたりしか」との問に對しては"Sung"と答へ得るは近世分解語法の特長なり。

上に一端を述べたるが如く、分解的諸國語にありては、思想の成分はなればなれに表はされて、別々の單語となることを得るが故に、吾人はその成分を色々に配置するの自由を有す。之に反して綜合的語形には思想の成分一語に融合せるが故に、緊密にして離る可らず。前者に於ては、一成分は他の成分との關係を離れて、獨立の形を具ふれど、後者に於ては、一成分は常に他成分と聯關して、決して自立することなし。例へば「吾讀」「汝讀」「彼讀」の如きは、兩成分を離して、二語の中間に他の語を挾むことを得て、措辭法自由なれども、綜合語にては「讀」は獨立の單語としてあらはるゝことなくして、常にその動作の主躰(人稱)たる自己、對者、もしくは第三者を示すものと結合し、一見分解する能はざるに至れり。一は「讀」てふ單語、そのまゝ種々の場合に應じて、いづこにも適用せられ、語詞配置上大なる効益あり。他は「讀」てふ獨立の形の單語存せずして、他の觀念と聯關してあらはるゝが故に、措辭上、使ひこなしに不便なるを免れず。使ひこなしの上より、彼を柔とすれば、此は剛なりといふべきか。而して分解語の、この點に於ても、綜合語にまさるは柔克く剛を制したりといふべきにあらずや。又「讀」てふ一觀念をあらはす語と、「讀」の觀念及びその動作を起す主躰の觀念が相連結してあらはれたる語とを對照するに、前者は抽象的にして、後者は具象的なるを知る。されば分析語は綜合語に比するに、抽象より具象に進みしものといふを得べし。古代印歐語に於て、かくの如く動作の觀念(後世の動詞にあたる)と動作を起こす者の觀念(人稱)とが必ず聯關して一語を成すは、吾

人をして或る野蠻民族の言語に於て、物躰の觀念(名詞にあたる)と、その物躰を領有する者の觀念(人稱)とが常に綜合して一語を成すものあるを想起せしむ。例へば南米の蠻語には「我頭」、「汝頭」、「彼眼」等の如き、具象的觀念を示す單語を有して、「頭」又は「眼」てふ抽象的概念を示す單語を欠けり。南阿のホッテントット語亦之に同じ。思ふに古代の綜合的諸國語は――梵語も、希臘語も、拉丁語も――或る點に於て蠻語と伯仲の間にあるものといふべし。單語の通用の撿束せらるゝも、單語の具象的なるも、共に必要の度を越えたり。かゝる撿束は、或る場合には、思想の自由又は精緻を、妨害するものにあらずして何ぞや。

次に姓の區別の、時として大に不便なることを論ずべし。英語に於ては、他稱の代名詞の單數に、男女兩姓を區別すれど、却つて文法上、不都合を來す場合なきにあらず。例へば「第一流の各詩人が、その最好の著なりと信ずるものを吾人に示さば、面白きことならん」といふとき、「詩人」はこの際男女を論ぜざるが故に、「その」は單數なる「各詩人」を承けて、その語形、男姓の he, his たるべきか、女姓の she, her たるべきか。「かくの如き舉動をなす者は罰せらるべし」といはずして、「何人」と雖も、かくの如き舉動をなすときは、その者は罰せらるべし」といはんに、「その者」を普通、男姓の he にてあらはすことあれど、その意婦人を取除きたるにはあらず。又「家内の各人は、彼等の臥床に在りき」といはんに、「各人」は單數なるに、之を複數にて「彼等」と承け「在りき」に複數の語形を用ゐたるは、困却の餘に出でたる變則なり。されば英人は、文法上強ひて、單數を承けて「その男若くはその女」he or she の如き拙劣なる言ひざまを以てするか、然らずんば、寧ろ呼應法に反きて、單數を結ぶに複數の語形を以てして、わづかに難關を逃れたり。かゝる不都合は、文法上の姓あるがためにあらずや。佛語に於ては、連躰語としての代名詞及び形容詞は、姓と數との變化に伴ひて、各異なる語形を有するが故に、英語にて my wife and children (吾が妻と子供)にて十分なるを、佛語にては、ma femme et mes enfants (吾が妻と吾が子共)といふが如き措辭上の煩雜あり。

次に數の區別について一言せん。英語に於ては、單數と複數との別は、異りたる語形にて示され、單複同形の語詞極めて少し。(deer, sheep, series 等のみ。) 丁抹語は、單複同形の名詞やゝ多かり。されど兩國語共に、その形容詞の形態は、連躰形としても、數の差別に拘はらざること、支那語の如し。

上に述べしが如く、實質(意義)を示す要素と、形式(關係)を示す要素とが、一語に綜合せるときは、質は特殊なる形(姓、數、人稱など)に於てあらはれ、特殊の象を具ふれども、形質兩要素が二語、若くは二語以上に分離せるときは、質は特殊なる形を脱し、特殊の象より抽出して、普遍の性を有するに至る。かく、形質分離して、具象より抽象に進み、特殊より普遍に入りたるは、言語の歴史的發達にして、決してその退歩にあらざるなり。而してこの發達と離る可らざる關係を有するは、呼應法(コンコード)の頽廢なりとす。古代印歐諸國語の特點として、形容詞は、數、姓及び格に於て、その名詞と呼應し、説明語の動詞は數と人稱とに於て、その主語と呼應したりき。されど、近世語は、なほ多少この法を守るものあれど、一般には之を紊亂するに至りぬ。説明語の形容詞と、その主語との呼應は、獨逸語に無くして、佛語に存し、連躰語の形容詞とその名詞との呼應は、獨佛兩國語に存して、英語に飲けたり。説明語の動詞とその主語との呼應は、英佛獨共に之を有すれど、丁抹俗語は凡そ三百年前に於て之を失へり。かゝる呼應の存するは、なほ曲折を失はざるがためにして、この法や、マドヰックの言をかりて言へば「本來主語に屬する觀念の變形を、無用にも、説明語に及ぼしたるものにして、贅澤物なり。「人々旅す」といふとき、「人々」が複數の形なるが故に、「旅す」も之に呼應して複數の形に變へざる可らずとなし、既に主語にあらはれたる複數の觀念を、再び説明語にあらはさんとするは贅澤にあらずして何ぞや。「旅す」を複數の形にして、旅行の度數の多きを示すものならば、さもありなん。」

かゝる贅物を棄てゝ、專ら實用に進みたるは、英語及び丁抹語の特色なり。丁抹語は、上述の如く、説明語の動詞と主語との呼應を有せざる點に於ては、英語より一歩を進めたれど、いまだ舊弊を改めざる所あり。即ち連躰形の形容詞と、その名詞との呼應がなほ保持せらるゝこと是なり。今、拉丁語古代英語、丁抹語及び近英語に於て、各「あらゆる善き老人の諸作」なる意の一句が、いかにあらはさるゝかを見んとす。

拉丁、諸作 (opera) 人の virorum あらゆる omnium善き bonorum 老 veterum. 複、屬、男 複、屬 複、屬 複、屬、男

古英、あらゆる善き godra 老人の ealdra manna 諸作 (weore.) 複、屬 複、屬 複、屬

丁抹、alle gode gamle mænds (værker.)
　　總　良　老　人　職、圖

近英、all good old-men's (works.)

「複」は複數、「屬」は屬格(チエニテーヴ)、「男」は男姓を示す。拉丁にては、複數、屬格共に四回、男姓二回繰返され、古英語は只姓の區別なきのみにして、他の語形は同樣に繁多なり。格のみについていはゞ、「あらゆるの・よきの・老いたるの・人の諸作」といはんが如し。丁抹語には、複數四回反復せらるれど、屬格は僅に一回あらはる。近英語に至りては、複數、屬格共に只一回語形にあらはさるゝのみにして餘の形容詞は格、數又は姓に關係なき、無曲折の語形なり。何ぞ古語の煩雜にして、近世語の簡約なるの甚しきや。しかも、思想の明晰に損益なくんば、誰か簡明なるものを優れたりとせざるべき。若し、之を數學的方式にて示さば、次の如くなるべし。

$$anx+bnx+cnx=(an+bn+cn)x=(a+b+c)nx.$$

但し、a b c はそれぞれの意味を示す要素(善、老、人の如き)を、n は複數を、x は屬格を代表するものと見做すべし。

かくの如く括弧に入れ得るは、丁抹語及び英語の長所とするところなれど、和漢の國語をみるに、かゝる措辭法は普通の事に屬す。例へば、「奇麗な、赤い花を見た。」といひて、「奇麗なを・赤いを・花を見た。」の如き、印歐古語流の煩はしき呼應を用ゐず。又、「紅葉のや・露伴の小說」或は Beaumont's and Fretcher's plays など、の如く、手爾波又は接尾辭を兩者に附着するに及ばず、單に「紅葉や露伴の小說」、或は B. and F.'s plays. の如く、たゞ一方にて屬格を示して十分なりとす。この簡便法は英語にあいては、近世の發達にかゝり、之を群聚的屬格(グルーペニテーヴ)と稱せり。思ふに、古語における呼應法の繁文縟禮は、言語發達の初期の狀態の殘りたるものなるべし。何となれば、特に言ひあらはすに及ばざる、普通わかりきりたる事も、未開の人心には通じがたきため、往々必要以上に、同じ觀念を、繰返へして表白する傾向あり。例へば、近英語に、No man knew nothing. といふ文に、一個の打消ありて足れるを、古英語には、No man not-knew nothing. とも譯すべき言ひかたを用ゐて、打消の意を强めんがために、同意の辭を反復したりき。これ亦未開の人心が至當なる要求なるべし。日本語の係結法の如きも亦か

の呼應法の類なるなからんや。かゝる呼應法において、反復、同一の觀念を言ひあらはすことは、南阿の繼語に見るところ、吾人は章を改めて之を說かんとす。

今本章を終るに臨み、上に說きたる要領を擧ぐれば左の如し。即ち近英語の語法の古代の印歐語にまさる諸點は、

一、その語形概ね短小なること、
二、その語形夥多ならざること、
三、語形の構成法及び使用法に變則少きこと、
四、形質分離して、抽象的言辭に富み、表白法容易なること、
五、從って、同一の要素を反復する呼應法の拘束を免れたること、

これなり。

# 第二章　原始の語法

バントゥ語の呼應法と想起辭――その由來に就てブリーグ氏の說――想起辭は次初の言語に於る全形反復の痕跡――日本語における實例――積分法――發音上の怠慢――語詞、殊に複合詞の短縮――略名法――國語の例とズル語の例との對照――單語を複合詞と誤解すること――印歐語の代名詞及び曲折と南阿語の想起辭――複雜と單純、不秩序と統一――近英語法の簡略と支那語

吾人は前章に於て呼應法の繁冗なる所以を明かにし、最後に同樣なる語法の南阿語にも行はるゝことを一言せり。いでや實例を以て之を示さん。

南阿の大半を占むる民族をバントゥ Bantu といふ。バントゥ語の方言にズル Zulu 語なるものあり。東南岸の一小岸に行はる。この方言に於て、例へば人のことを umuntu（ウムントゥ）といへり。若し人について或る事を述べんとする時は、その文章、又はその後に來る文章中の語詞にして、該語詞（人）と多少關係を有するものは、umuntu の語頭における或る韻音を、各皆その語頭に戴き、以て言者が現在、敘述せる所は、他に在らずして、實に人に關するものなることを忘れざらしむ。かくの如く人を想起せし

むるため、各語詞の語頭に冠せらるゝものは、或はmu、或はu、或はw、或はm、各一定の法則に由る。皆多少umuntuの語頭の痕跡を有するものなり。吾人は之を想起辭(レマインズ)又は備忘辭と名けんと欲す。南阿語學者ブリークは之を轉來接頭辭(ブリウエーターヤヤンフイックス)と名けぬ。今『吾等の美はしき人見ゆ、吾等之を愛す。』といはんにズル方言にては、

*umuntu wetu omuehle uyabonakala, simtanda.*
人 吾等の 美はしき 見ゆ 吾等(之を)愛す

となる。伊太利字にて示したるものは、皆かの想起辭なりとす。されば猶ほ『人、吾等の人、美はしき(其)人、(其)人見ゆ、吾等(其)人を愛す。』といはんが如し。單數に代ふるに、複數を以てすれば、『人々、吾等の人々、美はしき(其)人々、(其)人々見ゆ、吾等(其)人々を愛す。』となり、原語にては、

*abantu betu abaehle bayabonakala, sibatanda.*

となる。これ一種の呼應法(コンコーード)にあらずして何ぞや。

然らば、この呼應法の由來如何。先づブリークの說を擧げん。氏に由れば、バントゥ語の名詞はもと複合詞なり。凡べて複合詞(コンパウンド)の各成分が、なほ幾分か獨立を保てるときは、その成分を以て直ちに複合詞そのものに代ふるを得べし。例へば「軍船」(シャンダン)の語を承くるときは、只「船」といひて、軍艦の意となるが如し。英語にてもthe stems/ipといひし後は、只shipとのみいひて、汽船の意をあらはすを得。即ち全躰の語に尋いて、

"our *ship*, which *ship* is a great *ship*, the *ship* appears, we love the *ship*."

『吾等の船、其船は大船、其船見ゆ、吾等其船を愛す』。

といはゞ、shipも船もともに特殊の語意なりと知るべし。されゞsteamer「汽船」の複合詞を承けて、erといひ、「船」といふこと能はざるは、各その語の成分としてこそ存在すれど、單獨に用ゐらるゝことなければなり。然るにズル語にありては、the steamer に關して、左の如くいふを得。

"our *er*, which *er* is a great *er*, the *er* appears, we love the *er*."

『吾等の船、其船は大なる船、其船見ゆ、吾等其船を愛す。』

たゞ吾人の國語にありて、複合詞の後部よりするものが、ズル語にありては、その前部より取り、而して接頭辭となるの差あるのみ。即ちumuntu等は複合詞にして吾人は全形なるこの一語の後にては、その代りに、その半躰、即ち成分mu、u、w、m等を

用ゐるを得ること、なほ上述日英兩國語の場合に異ならず。

以上はブリークの解釋法なり。されど、南阿語の名詞を、すべて複合詞なりと斷ずるについて、氏は何等の歴史的根據を有するにあらず。由て吾人は、その說に從ふこと能はざるなり。而して吾が見解にては、かの想起辭は、畢竟、了解を助くるため、絶えず一語を全形の儘反復するを常としたりし太初の言語の遺習にはあらざるか。ズル原語にては、一文章の如くなれど、元來日本語の譯文の示すが如き、接續不完全なる數多の節(クローズ)より成りしものなるが如し。即ち『人、吾等の人、美はしき(其)人、(其)人見ゆ、吾等(其)人を愛す。』の如く、彼の方言の一語詞(ワード)は吾の一節(クローズ)に當れるものと見て可なるべし。人の意を、常に聽者の念頭におかしめ、己れの言へる所は、決して他に在らざることを斷る目的を以て、絶えず人の語の斷片を繰返へすに外ならず。されば、最初は一節(クローズ)に該語詞の全形を反復したりしならん。例へば、

"umuntu,
人
umuntu etu,
人 吾等の
umuntu yabantakala,
人 見ゆ

『吾は今其人に就て言はん、
其人は吾等のなり、其は吾等の人なり、
其人見ゆ、
si umuntu tanda."
吾等 人(を) 愛す
の如し。

吾人の國語に於ても、かくの如く特にその意義を忘れざらしむるためとにはあらねど、必要以外に、同一語を反復して冗漫に亘ること多かり。『かの人は賢し。』といふべき、『かの人は賢き人なり。』といふも、その一例なり。殊に、談話に拙なるか、或は弊辯なる人々は、同一語を繰返へすを常とす。かゝる冗語を用ゐざれば、意を達せずと恐懼せるに似たり。又日本の敬語の如きも、往々過度に反復せらる。恭謙の意を表せんとて、濫りに「お」「御」を語頭に冠し、「様」を語尾に附するは、即ち是なり。「お寒い」「およろしい」「御丈夫様」の類、慣用とはいひながら、要するに南阿繼語の想起辭と趣を同じうするものといふべし。『あなた様も御丈夫様で、』『お天氣がおよろしくて、』など、わけて東京の婦人の言葉に往々聞く所なり。又敬語の呼應法と稱して、冗長なる言ひまはしを、正當なりとなす人なきにあらず。例へば前後に敬語を用ゐたる場合にては、「就いて」を「就きまして」とし、「從つて」を「從ひまして」とし、「於いて」を「於きまして」とせざる可らずと爲し、甚しきに至りては、『一に二を加へれば、三になる

位なことは、誰も知らぬものはありませぬ。』にて十分なるを、『一に二を加へ、まずれば、三になります位なことは、誰も存じてをりませぬものは御座りませぬ。』とせざれば、敬意あらはれずとなすものあり。吾人は之に對して一言するの要なし。只印歐古語及び南阿蠻語の呼應法の外に、日本語中に好適例を得たるを喜ぶのみ。

本題たるズル語にかへりて、吾人は次に、かの接續完からざる數個の節（クローズ）若くは文章が、いかにして一個の完き文章にまとまり、又もと二個の單語より成りし一節（クローズ）が、いかにして一語に結合したるかを見んとす。先づ、眼を南阿より離して、吾人に親しき國語における現象を觀察せよ。我を知るは、即ち彼を知る所以、近きを以て遠きを推すは策の得たるものなればなり。吾人は、諸國語に積分法（インテグレーション）と稱する一種の語詞複合法存するを知る。例へば、「何はともあれ」の意のall be it（albeit（さはれ）と約まり、「さもあるべし」の意のit may be（may-be（多分）と約まりたるが如く、一文が一語と成るの類是なり。國語に於ても、「ともかく」、「けれども」、「何しろ」、「しかし」、「それなりけり」、「あすならう」（明日は檜木）、「あらまし」等の例あり。なほ『外の人は遊ぶにもせよ、自分は勉強する。』の一文の前方に位せる副節（サボーディネート、クローズ）と、次なる主節（プリンシパル、クローズ）との接續ゆるやかなるを見よ。かくの如く、一節が一語に變ずる現象、又各節の接續緊密ならずして不完全なる文章を成す現象は、原始の言語にも起りたる所なるべし。

次には、吾人の國語に存する音勢法（アクセンチュエーション）の、また蠻語にも行はるゝことを注意せざるべからず。言者が聽者に對して、新に傳へんとする觀念、即ち現に聽者の念頭に上らざる觀念をあらはす語詞は、多少強勢を以て發せらるゝを常とす。之に反して、既に對者が知悉せりと見做さるゝ觀念、或は既に見聞に觸れたる事物をあらはす語詞には、音勢を與へずして、弱く發音す。（之に關して讀者は宜く前年の名著稱要に出でしストロンガ氏言語史綱要第六章を參照せられよ。）例へば、甲が突然乙に向ひて、『加藤は朝鮮へ行つた。』と話しかけたりとせよ。このをりの「加藤」及び「朝鮮」の二語の音勢は、甲が他日再び、如是の事實を既に知悉せる乙に向ひて、『加藤は朝鮮から支那へ行つた。』といふをりの、同じ二語の音勢よりも強かるべし。而して後の文章において、「支那」の一語、割合に強勢を有するならん。之につぎて、注意すべきは、音勢微弱なる語は、その發音多少不明瞭に傾くを免れざること是なり。これ必要なる語詞は強く、明かに發音せざる可らざれど、不必要なる語詞は弱く、且つ曖昧に發音するも差支なければなり。是に於て、か

丶る、發音上の怠慢(レーシチス)は漸く音韻變化を來す。その結果は後に述ぶるが如し。さて上述の現象を南阿語について、觀察せんに、『人吾等の人・美はしき(其)人・(其)人見ゆ、吾等(其)人を愛す。』の文に於て、「人」の語五個あるが中に、最初の語の音勢は、他の四語の音勢に比して最強かりしなるべく、他の四語はその音勢割合に微弱なると共に、その發音亦割合に等閑に附せらるゝ傾向を取りしなるべし。これ言語上の經濟則に從ふものに外ならず。

かゝる傾向に伴ひて起る現象は、反復せらるゝこと甚しき語詞の形の短縮することと是なり。殊に、複合詞にありて、この傾向著るし。複合詞の、反復又反復使用せらるゝや、終にその成素の意義は全く失はれ、只全形の儘なる意義のみ殘るに至る。而して音韻の省略及び變化之に伴ふ。是に於て、複合詞は、複合詞として感ぜられずして、單語たるの觀を呈す。言語亦歷使用されて益消耗することあるは、自然の勢なり。語詞の短縮は、日常固有名詞に於て、最も多く之を見る。我國に於て、男子の名を呼ぶには略稱を用ゐるを常とし、女兒の名も亦「きいちやん」などの如く省略せらるゝとあり。「伊、侯」「隈、伯」「樞、相」「文、相」より、「日、鐵」「八、百、長」「魚、勝」に至るまで、略呼底止する所なきに似たり。吾人も亦現に本書中「南、阿」といひ、「印、歐」といひて、略稱を用ゐたり。略名を用ゐて事足らば、故らに全名を言ふの要なく、而して之に慣るれば、終に全形を忘るゝに至る。蓋し人性の怜悧なるや、特に明晰を要する場合に非れば、敢て明晰に發言せず、又文章の前後の關係(コンテツクスト)より、若くは其時の場合(シチユエーション)より、容易に推察せらるゝものは、之を等閑に附し、或は全く之を顧みざるなり。

吾人は今、上述の略名法及び「頗る得意」を「すことく」と略するが如き方法より離れて、複合詞及び虛辭の語源に遡りて、その成素又は根義を尋ねんとす。例へば「さむ」「さ」「おもさ」に於ける「さ」はもと「さま(狀)」といふ獨立の單語なりしなり。「ざま」「ありさま」「さかさま」「とさま」(外樣)におけるが如く、狀態及ひ方向を示す語なりしなり。方向の意にては、古くは『初瀨、さまにおもむく。』といひ、今も方言に『あつちさ行く。』などといへり。中古以來、直接に姓名を唱ふるを憚りて、その人の住する方向を言ひて、以てその人の稱謂に代へたるより、「さま」は人の名に添ふる敬稱となれり。かくの如く比喩的(メタフオリカル)に發達し來りたる「樣(コヤウ)」なる語が、その意義と共に、如何にその聲音を變化したるかを見よ。先だつ單語と複合して屢使用せられたる結果、諸地方に於て、サン、サ、

ハン、アン、ンと變じ、又チャマ、チャン、チャとも、ツァマ、ツァン、ツァともなり、又マともなれり。南阿語のumuntuが、他の語詞と複合せる場合に、munwmの如き略躰となれるは、「さま」の「さん」「さ」「は」「ん」「ま」となれるに比すべからざるか。次に、敬語の「お」は、もと大の義なる「おほ」より轉じたるものにして、今接頭辭として「お天氣」「およろしい」の如く用ゐられ頗はしきまでに濫用せらる。「お」又は「さま」の反復に就いては、嚮に一言せり。「お」は既に略躰なれば、更めて爰に述べず。今「さま」の略躰を用ゐて、例へば、『あなたまも御丈夫さで、』といひたらんには、ズル語と異曲同工なるべし。

最後に「ひと」(人)なる語が、複合詞中に於て、いかに變化せるかを見るに、「異人」の如く、單語における音と同じき者あり。「何人」の如くpの原音を保存せるあり。「戀人」の如く濁音化せるあり。「商人」の如く「んど」となり、「仲人」の如く「うど」となれるあり。「盜人」の如く、上略せられて單に「と」となれるあり。「素人」の如く「うと」となれるあり。「借人」の如く「て」となれるあり。「田舍人」の如く「ぼう」となれるあり。「黑人」の如く「ぼう」となれるあり。〔上田博士著國語のため、第二版のうち、昔語人の項に就きて、一三一乃至一三八頁參考。〕單語についていへば、原音ヒトは今全く滅びたれど、その次期の變形フィトは今も邊土の方言には殘り、又東京方言にてはヒトより更に變遷してシトとなれり。今之を時處の別なく總括せんに、「人」は單語のヒト、フィト、シト、複合詞の成素としてのヒト、ビト、ビト、ンド、ウド、ト、ウト、テ、ボウ、ポウ等となりてあらはる。而して最後の七個を略躰とす。思ふに、同じく「人」の意なるumuntuの略躰、umuwmは、これらの略躰ンド、ト、ウト、テ、ボウと比するを得べし。されば、ズル語にて曾て『人・吾等の人・美はしき(其)人・(其)人見ゆ、吾等(其)人を愛す。』といひしを、今は略躰を用ゐて、『人・吾等て・美はしぼう・うと見ゆ・吾等んど愛す。』などといふと考ふるも大差なかるべし。

かくの如き省略法によりて、umuntuは先づumuの如き半躰に變じ、漸次一層簡略に進みしなるべし。人心に語源の意識明かに存せざるときは、元來の單語も、時として、複合詞と感ぜらるゝことあるを以て見れば、それを半躰の一語詞として獨立に用ゐることなきにあらざるべし。umuが略躰として想起辭に用ゐらるゝことあるに由り、後にはumuntuはumuとntuとより成れる者と思惟せらるゝに至れり。これ所謂語源俗解(フォルク・エチモロジー)と稱する作用に基く。かくて、この語は語感上兩分せられ、後半が人の義を示し前半は一種の冠詞(アーティクル)の如き觀をなせり。この種の現象は、吾人の國語中に

も往々起る所なり。英語に於て、俗にanatomy(解剖學)をan atomyと誤解せるものあり。これ一方にはan atomなどの連想もありて、anを冠詞と信じたるに由る。日本語に於て、遭遇したる一例を擧ぐれば、英語の「ベイア」(熊)をとりて、犬を「ベーヤ」と命名したるに、人このヤを呼掛けの手爾波と誤信して、後には「ベー」と呼ぶに至りしことあり。敬語ならぬ「を」又は「お」を敬語と信じて之を取去りて、例へば「をかしい」を「かしい」といはゝいかに可笑からん。「なぎなた」も之に類す。さはれ、これらの例を滑稽とのみ見過ごすは賞きわざにあらず。時として嘘から出た誠ありて、例へば、英語のpease(豆)及びcherris(櫻)は、數世紀前には、單數にも複數にも用ゐられしに、後にはそのsを、複數の語尾と誤解して、新にpea及びcherry(佛語には原形のcerise(スリーズ)を保存せり)なる單數形を作るに至りし類あるなり。されば、南阿語に於て、民俗の語感にて、nを語の要部となしゝこと固より有り得べき所ならずや。

何はともあれ、吾人は南阿語の想起辭を觀察して、印歐諸國語の代名詞の由來を追迹するたつきを得たり。いかにとなれば、かの略昧の想起辭は、本昧を代表すること、猶代名詞が名詞を代表するに異らざればなり。畢竟代名詞(殊に他稱の人代名詞、關係代名詞及び或る種の指示代名詞)とは、是吾人をして既に嚮に述べたることを想起せしむる辭に過ぎざるなり。

吾人は茲に南阿語に別を告ぐるに方りて、印歐語の曲折語形の起因を、かの想起辭に於て見るを得べきこと、此等の語形は、太古、言語が全く具象的階段(前章參照)に在りし時の遺習にして、元と言者に在ては、この曲折に由て新なる觀念をあらはさんと欲したるにはあらで、只聽者をして、某觀念を忘れざらしめんと欲したる者なること、而して勞力を輕うして、同一の功を收めんと期したるが故に、音韻變化を來し、其結果短小なる接尾辭の如きもの成立つに至りしことを茲に再言す。

吾人は印歐語における諸種の接尾辭の由來を茲に詳說するの煩を避くべし。其等諸種の接尾辭のいかにして或者は一定の姓を示し、或者は一定の數を示し、或者は一定の格を示し、或者は一定の人稱を示すに至りたるか、即ち各接尾辭は如何して一定の語法上の職能を有するに至りたるかを說かんは、吾人の主意にあらず。只、單數と複數との別、男姓と女姓との別の如き、極めて容易らしき區別を、一定の形に言表はし得るに至りしまでには、豫想外に迂遠なる徑路をとり、思掛けぬ程複雜

なる經過をなしゝものなることを記憶せざる可らず。古代の印歐語は三種の姓、三種の數、數種の格、三種の人種を表はすそれぞれの接尾辭を有したりき。然れども、一定の姓、一定の數、一定の格、一定の人稱に就て、それぞれの接尾辭を該當し、以て一定の職能に對する一定の形式を得るに先ちて、極めて煩雜なる差別を有したるや疑ふ可らず。近世語はその形態及び構造、古代語の複雜なるに比すれば、甚だ單純なり。然れども、近世語の單純が古代語の複雜より生れしが如く、古代語の複雜は、太初一層複雜なりし語法の稍統一に就きたるものに外ならざるべし。ともかくも、古代の語法は極めて複雜に、極めて不統一なりしかど、徐に、單純に、進み、漸次統一するに至れり。變格は正格に類推して、簡單なる語法生ぜり。使用せらるゝこと極めて多くその語形倭小なる代名詞にすら獨一層簡略に化したる實例あるを見る。手近き一例は、英語の對稱人代名詞は凡四百年前に在ては、單數主格thou(ザウ)に對して同對格thee(ザイー)複數主格ye(ヤイー)同對格you(ユウ)なりしも、今や散文及ひ會話に於ては、孰れもyouの一語に歸着するに至りぬ。英語のI(吾は、吾が)とme(吾に、吾を)との相違の如きは極端なれど、古語に於ても同一語根より出でたる語詞にして、格を形成する語幹

各異なるもの甚多かり。或る格には一の語幹を用ゐ、或る格には他の語幹を用ゐるが如き變則は、希臘語のhydōr(ヒュドール)(水)に於て見る所なり。この語は、もと印歐根語にては二種の語幹を有したりき。一はnを含むもの、他はrを含むもの是なり。希臘語にては、此等兩種の語幹を保存し、主格にhydōrといひ、屬格(ゲニティヴ)にhyda-toといへり。但し後者のa母音は、元來nの變躰なりしこと、他の同語族には、明にnの形にて現はれたるを以て知るべし。近代語にては、如何なる格に就ても、皆同一の形を用ゐ、一方には、英語のwater(ウオーター)となり、獨逸語のwasser(ヴァサー)となり、共に均しくrを保持し他方には古代ノールス語のvatn(ヴァトン)となり、瑞典語のvatten(ヴァテン)となり、丁抹語のvand(ヴァンド)となり、皆一樣にnを保持し、孰れも二樣に使ひ分けらるゝことなし。即ち英獨のは、希臘のhydōrに當り、他の三國語のは、そのhyda(n)t-に當る。瑞典の湖名にVättern(ヴェテル)とあるは、以上のrとnとの兩種が混成(コンタミネイト)したるものなり。)されば英語にては、かゝる簡約によりて名詞として、

「は」或「が」の格、　the *water* is cold.　水はひやゝかなり。

「を」の格、　he drinks *water*.　彼は水を飲む。

「の」の格、　the surface of the water.　水の面。
「へ」の格　he fell into the water.　彼は水へ落入りぬ。
「に」の格、　he swims in the water.　彼は水(中)に泳ぐ。

の如く、如何なる格にても、其形態異らざるのみならず、或はdid you water the flowers?(花に水をそゝぎしや)の如く動詞となり、或はwater plants(水草)の如く、準形容詞となれりかくの如く一語詞が毫も形態を變ずることなくして或は名詞として種々の格に用ゐられ、或は動詞となり、或は形容詞となるは、支那語の特質にはあらずや。この點に於て、近英語は支那語に接近せるものといふを得べし。今、吾人は之を次章に詳論せんとす。



# 第三章　支那語の變遷と語序の發達

支那語の特點——支那語を以て原始の言語とする說駁——其反對說——支那語の音調(四聲)——音調に就てメンデヴッド方言の類例——支那語は元と單綴音に非ざるの論——原始の語序は不定なりし事——「主語、動詞、目的」の順序——顚倒法と疑問文——音調法と疑問——正序法と顚倒法との衝突及び調和——英丁佛三國語に於る語序の一定と新語形の發達——(第一)語序の一定と語法の簡約との先後論——(第二)語序法則綴殿の得失論——ヨハンソンの反對論及び其辨駁——ドッヂの反對論及び其反駁——結論

支那語に於ては、單語は皆單綴より成り品詞は全く區別せらるることなし。例へば「大」は場合に由て或は「大いなる」或は「大いに」或は「大いにする」或は「大いさ」の意義を有す。數、人稱、時、格等の語法上の諸關係は、語尾のごとき者にて表はさるることなく、語詞はさながらにして、毫も變化せず。名詞の單數なると、複數なるとは、一に前後の關係によりて察すべく、決して一定の通則に基かざるなり。唯誤解の恐あるか、さらずば複數の意を明かにせんと欲する場合に限り、別に「幾」「數」などの語を添ふることあり。然り而して支那語法の要部は語序(語詞の順序)に存す。即ち「大國」といへば「大なる國」「國大」といへば「國大なり」又は「國の大さ」の意となり、「子女」と「女子」と

一語の顚倒に由て意義全く相違するが如し。又支那文法家の用語を借りていへば、實字の外に虛字なるものありて、語法上靈妙なる用に供せらる。例へば、「之」を二語の中間に措く時は、其二語を單に相連ぬる場合よりも、從屬（ヂエニチーヴ）の關係を示すこと切なりとす。「民力」といふよりも、「民之力」といはんかた、同意ながらも一層明晰なり。「之」を一文章の主語の後に措くときは、其主語は屬格（ヂエニチーヴ）となり、該文章は即ち一種の屬節（ヂペンデントクローズ）に變すべし。「王保民」及び「父保子」の文より、主語「王」及び「父」の後に「之」を加へて、「王之保民」、「若父之保子」てふ一文章を作るが如し。「之」は更に、「王保之道可見」の如く、一文章を屬格となすの力あり。さては、「王保之民」又は「保民之王」の如く、主語（王）と動詞（保）とより成る語（ナンドクレーズ）群（王保）、又は動詞（保）と目的（民）とより成る語群（保民）を、各屬辭（アツトリビユーチーヴ）として、それぞれ名詞（民）または王）に連結する作用を有す。

如是を以て支那語の特質となす。若し舊代の言語學者に從へば、吾人の印歐語も亦語根時代にありては、斯くの如き構造なりしならんと類推せらるべし。『いづくの國語の組立をみるも、皆その最古の形は、組立最も單純なる國語、例へば支那語に於て保存せらるるが如き形と、本質全く相一致せり。』とは、シュライヘルの云へる所



にして、同じ說はマクス・ミュラー、ホイットニイ等の書にも見えたり。支那語學者として名高きエドキンス Edkins も亦同じ見解を懷けり。其著『支那語の發達』（一八八八年）の序言のうちに『支那語は、原始ながらの語序にして、單綴音の組立今もかはらず。是等の特質は以て支那語が人類の祖先語の直系なるを證するに足る。祖先語そのものなりとは爲すべからざれど、世界の開けし其曉に於て、初めて用ゐられしものと假定すべき據所、最も確なる言語は支那語をおきて他にあるまじ。』といへり。

然るに、支那語の原始に關しては異說あり。既に一八六一年に於て、レプシウス Lepsius は支那語と西藏語との比較に由て、『支那語は當初より單綴なりしには非ずして、嘗て多綴の組立なりしが今の形に變じたること』なることを證明せり。支那語を世界の開けし曉に於て初めて用ゐられし言語となしし、エドキンスは、支那語の現在の發音を以て、古代の狀態を推したる也。支那に於ては、一字即ち一語なるが故に、文字は毫も舊形を改めず、從つてその同一形の文字に基きて昔も今の如く發音せしかと思誤ること、古來表音文字に慣れたる歐洲の學者にはありがちなるべし。然るに、今日の方言に存する發音を觀、字典に記

るせる表音法(反切等)に照らし、僧徒が漢字を以て梵語を寫したる方法を察し、或は韻を考へ、或は表意字を以て表音字となしたる形跡に鑑みなどして、吾人は支那音の變遷の著るしきこと、並にますます簡易なる形に向ひて變遷したるものなることを知れり。殊に子音の連結は甚だ簡略になりぬ。

支那語現在の發音に徴するも、吾人は同樣の結論に達するを得べし。即ち四聲を以て、一語の諸意義の變更を示すことあるを見よ。「王」は下平にては名詞なれど、去聲にては、「王となる」「王たる」の意あり。「好」は、上聲にありては、「好き」の意、去聲にありては、「好む」の義なり。「買」「賣」の二語、同音なれど一は上聲にして、他は去聲なり。

さらば、如何にしてかかる變化を來したるか。其由來に就てエドキンスは、『初め「好む」及び「賣る」の義をあらはす語なかりしを、既に存せる「好」及び「買」てふ語に聲調を加へて新に作出ゑし也』と説明したれど吾は從ふ能はず。ヰクトルアンリV.Henryも同樣の見解を述べて云く、『原始の言語にありては、「我は好む」と云はんとするには、「こは(我に)好し」との意にて、「好」てふ語を發しつつ、特殊の手眞似を爲ゑしならん。其手眞似が、同音の音勢(アクセント)もしくは聲調(トーン)に影響して、かくの如き差異を生じたるなり。

最初、「マーイ」は音勢をおかざる場合には、只漠然「交易」の意を示ゑしものなるべく、而して特殊の狀態に應じて、其意義並に音調分化するに至りたるならん。即ち、一方には、當の物我が方に來るの意にて、手眞似を以て「此方へ」と示しつつ「マーイ」と言ひ、對者なる他方は、當の物我より出でて汝に行くの意にて、反對の手眞似を以て「先方へ」と示しつつ「マーイ」と言ひしならんと想像せらる。かかる手眞似の結果、同語根の音の音調と意義との變化を來たしたるなり、』と。されど假りに、手眞似が音調に影響を及ぼゑしことを認むとも、「汝が買ふ」「我が賣る」「彼が賣る」などの場合には、そも如何なる手眞似と、いかなる音調とを以てしたりけん。要するに、二氏の説明想像に過ぎたり。されば吾人は他に説明を求めざる可らず。支那語の如く、音調の變動を以て、同一語の意味の差別を示す言語、歐洲にも無きにあらず。普魯士領南ユットランドのズンデヴッド(Sundevad)といへる地方に話さるる丁抹方言には、高低二種の聲調區別せらる。これなくば全く同音調なるべき語詞を、音調に由りて相分つこと、支那語に於るが如し。naは低調にては、「愚人」の意なれど、高調にては、「愚人ども」(複數)或は「妖く」てふ動詞となる。「乘る」の意なるには聲調の如何によりて、命令

法ともなり、不定法ともなる。吾人は、爰に聲調の變化の由來を手眞似に歸するを要せず、直ちにスカンデナヴヤ語の歴史によりて之を説明し得るなり。低調なるは、もと單緩音なりし語に於て見らるべく、(丁抹標準語のnar, ridを參照せよ)高調なるは、もと兩緩音(デスヴァヒング)なりし語に於てあらはる、(丁抹語のnarre, rideを參照せよ)。皆て單兩、二種の緩音に於て高低兩調の分たれしもの、今は同一種の緩音に於て分たるるに至りしなり。

支那語に於る同音語も、もとは單緩音に非ずして、別に語尾の類が添ひたりし者なりしを、その語尾やうのものは、何等の痕跡を遺すことなく消滅し、只僅に、在りし昔の聲調の差別をのみ留めたりと假定し得べからざるか。五聲の一は、少くとも南京語に於ては、結尾のktpを脱落して、入聲より生じたりとの事實は、此假説を確かむる一證左となすに足るべし。

そはとまれかくまれ、支那語が原始の言語、即ち人類の祖先語なりとの迷論は、エルンスト・クーンErnst Kuhnの『恒河以外諸民族の由來及び言語に就て』の講演(ミュンヘン、一八八三年)によりて全く破碎せられ了りぬ。氏は支那語と、西藏、緬甸及び暹羅の諸國語とを、比較して以爲らく、是等相關係せる數國語は、其構造同一にしていづれも孤立語に屬し、曲折を有せず、而して其語法は主として語序に在り。然るに語序の法則は、是等諸國語みな相異なるは何ぞや。是に於て、クーンは結論して云く、吾人は是等の相異る語序法の孰れか一を以て根源の語序法なりとなす能はず。何となれば、しかする時は、他の民族は、何等の理由なく、而も甚だしき混雜に陷るをも顧みずして、元來の語序法を變更したることとなるべければ也。されば一方の語序法を以て原始のものと見做し、他方の語序法の祖なりとすることなく、いづれの語序法も、共に皆一層古代の語序より生れしものなりとなさざる可らず。即ち新舊の別を設くるは非なり。上述諸國語は、今こそ、各、序語法一定なれども、其等が據りて以て分出したる祖先語ともいふべき太古の言語に於ては、語序法は極めて自由にして決して一定の秩序を立てざりしならん。而して根本語に於る語詞配列にして果して無秩序にして自由なりきとせば、後世に發展したる上述諸國語に於て見るが如き語法以外に何等か語法上の便宜ありて相互の理解を輔けしことなかる可らず。換言すれば、語詞相互の關係を示すに、印歐語に於るが如く曲

折語尾もしくは轉成辭（アグリュティネーション）の類のものを以てしたるならんと。

かくの如くクーンは、支那語は最初より一定の語序を有したるに非る由を說けり。さはれ、吾人は、抑も一定の語序とは何ぞやとの疑問を深密に考察する時は、亦同樣の結果に達するを得べし。未開の原人が一定の秩序に語詞を配置したりとは吾人の考ふ可らざる所なり。然るに、支那文を見るに、語詞の配置論理にかなひて精緻なること、例へば英語にて書簡の表書に記るす文面におけると異なるなし。Miss-Emily-Brown-23-High-Street-Brighton-Sussex-England と、孤立語風に語詞を序列するは支那語と全く同じきにあらずや。只、此は彼と、語序相反對せるのみなれど、いづれも一定の秩序を保てり。即ち、英語は殊より汎に及び、漢語は汎より殊に進むの別あるのみにて、論理の一貫に至りては二者全く等し。

顧みるに、野蠻未開の原人――非人（コンメンシュ）よりはやや優りたる原人（ウールメンシュ）が、かく完全なる順序に、その語詞を、その思想を配置したるべしとは、吾人の思惟する能はざる所なり。すなはち、吾人は思考と言語とが、論理にかなひ、秩序宜しきを得、整然紊れざるに至りたるは、人類が永き、煩はしき道程を經歷したる後ならざる可らず、と言はんと欲す。其思想、其語詞の混亂錯雜名狀す可らざる原人に、語法上の一要素として正確なる語序の存在しけんとは思ひもよらず。一定の語序法は、最も高等に最も精緻に、從つて最も後世に發達したる語法なりとす。然るに、從來の言語學者が語序法に就て言ふ所多からざるはいぶかしき限りなり。ブリークはバントゥ語の語序に關して說く所精しからず、僅に同語族が、意義の變化を示すに、一定の語序法を以てせずとばかり記るせり。さはれ、是れ吾人の所論にとりては、甚だ有力なる證據なり。ともかくも、語序法と、其他の語法との關係に就ての攻究は、それと相聯關する幾多の問題を言語學者に供す。

今其一問題を提供せん。例へば、英語、丁抹語、佛語、支那語に於て、主語、動詞、目的の順序に由る語序法の行はる理由如何と尋ねみよ。この語序が支那語に於て行はるるを見るに歐洲語が之を東方より傳來したりとは、おもはれねば、吾人は只當現象は人間思想の自然なる發展なることを信ぜずんばあらず。而して、古代の印歐語に於て、かゝる語序法の恒に行はれざりしを以て察するに、此語序は進步したる人間の思想にのみ特有なりとなすべし。

次は、英語などに於て"Has John got his hat?"の如く、疑問の際には、通例の語序を顚倒することあれど、吾人は未だ斯る顚倒法の由來を說きし文法家ありや否やを知らず。もと、古代日耳曼語、さては拉丁語等に於ては、語序の顚倒は疑問の時には限らざりき。この痕跡今も殘り、英語にては、動詞の文章の初めに在らざるをり(About this time *died* the gentle Queen Elizabeth.)及び挿入文("Oh, yes," *said* he.)に於て行はる。獨逸語にても、動詞を以て文章を起こす例、疑問以外に無きにあらず。されど、要するに、近世の西歐諸國語に於ては、一般にかかる語序法避けられ、若し動作の意味に重きをおきて、之を主語の前に序せんと欲する時は、動詞の前に一種の似而非主語を措きて、語感を滿足せしむ。英はthereを、丁抹はderを、獨はesを、佛はilを、瑞典はdetを用ゐるを常とす。例へば、「……の時が來る」の意味を言表はすに、「それ來る……の時が」のやうにすること次の如し。

英. *there comes a time when*……
(倚主)(動詞)(主語)
丁. *der kommer* en tid,da……
獨. *es kommt* eine zeit wo……
佛. *il arrive* un temps où……
瑞. *det kommer* en tid daa……

されば、顚倒語序は、疑問の文章に特有なるにあらざるを知るべし。次に吾人の注意を要するは、疑問をあらはす時に、語序はいかにともあれ、全文もしくは其最肝要なる部分を發音するに、一種特別なる高調(イントネーション)を以てすること是なり。即ち「尻揚り」に調子を高むるの謂なり。此法今も行はれ、"John?" "John is here?" 「太郎?」「太郎はここに居る?」の如く、其語序よりすれば、正序法にして、只聲調の變化に由てのみ、その疑問文なること知らる。斯る方法は、嘗て疑問の自然なる表白法として普通に行はれ、又顚倒語序は前述の如く疑問文以外にも用ゐられきと雖もかの聲調と、この顚倒と、同時に起り、即ち疑問文には、顚倒序法を用ゐると共に、發音の調子を高むるに至りたる時代存したるならん。最初は、顚倒と調子と相伴ひて疑問の意を示し、顚倒法と疑問文とは、中間に聲調の昂上てふ一要件を介して連想せられたりしも也。然るに、次第に語序の顚倒が疑問の主位に上り、主客その位をさかしまにするに至りぬ。されば、"Is John here?"とふ場合は、"John is here?"とふ場合よりも

聲調の高まり著しからず。これ、前者に在りては、語序の顚倒そのことを以て直に疑問の意を覺るを得れど、後者に在りては、高調そのものが疑問のしるしなればなり。日本の例にても、「太郎はここに居る?」といふときの最後の調子は太郎はここに居るか」といふときのそれよりも高きことしるけし。

かくて疑問の表はし方はほぼ一定せり。然るに、主語を最初に思浮べて、之を文章の劈頭におかんとするは、是れ普遍の大法なるを如何せん。兩個の理論は、爰に相衝突するを免れざれど、英、丁、佛の三國語に於ては、終に相調和し、其結果疑問の顚倒序法はさながら保存せらるると同時に、動詞はやはり主語の次に措かるるに至りぬ。之を英語に見るに、助動詞doを用ゐて、實質をあらはす本動詞その者を、主語の後に序するが如し。Came he not home to-night? (涉翁のロメオ、一〇四五)とゝはずして、吾人は今Did he not, 又はDidn't he, come home to-night? とゝふ。又"Will he come?" "May become?" の如きは、おのづから主語の次に動詞の理法にかなへり。副詞が文章の初に在る時も亦同樣の序法用ゐらる。ことはカーライルのまはしば用ゐし所、例へばThus did the editor see himself.. の如し。然るに二百年前の一記者の文を見るに、Thus saw an editor himself. とあり。次に丁抹語に於ては、英語のdoに相當するmonの語用ゐらる。但し、此語は凡二百年前には、助動詞にして、動詞の不定法を承くると、英のdoの如くなりしかど、今や直説法と共に用ゐられて、恰も疑問副詞の觀あり。例へばMon han kommer?(あの人は來るだらうか)の如し。佛語にては、上述二理法を調和するに就て、二種の語形を作れり。第一は、Est-ce que pierre Pat Jean? に於てest-ceを以て疑問をあらはし、Pierre bat は正序法に由れり。第二、Pierre bat-il Jean? に於て似而非主語ilを動詞の後に措けり。されば、其結果、丁語のmonと同じく、爰にもest-ce "que"(文字の上にては、離れてあれど發音上には一体に合せるものと謂ふべし)てふ一虛字發達し、俗語にては、tiてふ虛字生ぜり。tiの由來は、極めて、おもしろければ、爰に畧説せん。初め、語尾にtを有せざる他稱の動詞も、est-il(發音e-til)等に類推して、aime-t-il(發音em-til)の如く變せしが、かくて音便に由て合体したるtiは、語感上、他稱の動詞に附して、疑問を示す一虛字となり、再變してtiとなりて、手爾波(日本の「か」の如き)として、他稱以外の場合にも用ゐらるるに至りぬ。例へば、"Ton frére di ti?" "Je di ti?" の如し。

以上説く所を以て、語序の變遷を研究するの興味を示し、且つ新語法並に新語形

の發展を聊か闡明するに足ると信ず。是に於て、吾人は本書の主趣に關して、最も重要なる二個の問題に遭遇す。第一問は、語序の自由と曲折の複雜との關係如何、即ち有史時代に於て、語法の簡約と語序の一定と、常に相伴ひて起りし所以如何といふに在り。而して、二者は偶然に起り、相互に全く關係を有せざるか、即ち、兩現象間には因果の關係なしや否や、是れ吾人の解決せざる可らざる所。

吾は信ず、多數の讀者は皆語序の一定が前件即ち原因にして、語法の簡略は後件即ち結果なるを見て、以て前問を肯定せらるるならんと。然るに、曲折語尾先づ音韻頽化即ち聲音法則の盲力に由て消滅し、然る後に語序一定して、其缺點を補ふに至りぬ、と說くものあり。果して然らば、曲折又は語序のいづれにも由らずして、語詞相互の關係を示す中間の一時期、即ち思想相通ぜず、從ひて言語の實際無用なりし一時期の介在を想像せざる可らず。されば此說の成立ちがたきや明なり。故に語序の一定先づ行はれたるに相違なし。言者の思想心中に錯雜せずして、既に整頓するや、自然の結果として語詞の配置、秩序を有するに至るべし。されど、斯る思想の整頓、語序の一定に先ちて、語尾の音韻消失することあらんには、言語の理解を妨ぐべきが故に、聲音の變化はおのづから防がれ、語尾の沈淪從ひて沮まるべき道理なり。さはれ、語序既に整ふや、語尾短縮し、遂に脫落すとも、何等の差支を感ぜざるなり。

吾人は、語尾先づ一定し、尋で語尾消失せりと云へり。されど、これ決して語序いづくの點にありても悉く整頓したる後、初めて語尾脫落するに至りぬとの意に非ず。實際の事實は、甚しく複雜せること勿論にて、即ち一方の變化は、他方の變化と相交錯し、一々の場合に就きては、容易に先後を判じがたきものあり。吾人の意、只變化の方向を示したるに過ぎず。されば試みに拉丁語をとりていはんに對格(アブラティーヴス)の名詞は、常に動詞の後に措かるるを以て、ここなる對格語尾無用となりたり、故に結末のmは消失せぬ、とのやうには、指摘するを得ざることとしるけし。然りと雖も、以て吾が假說の本來眞理なるを破するに足らざる也。拉丁語の結末のsを見よ。シセロは、既に語尾のsの失はるべき傾向の著しきを明言せり。然るに、其傾向の實現せざりしは何ぞや。是れ他なし、拉丁語の如き、語序自由なる國語にありては、名詞及び動詞の語尾に於て要部を占むる一子音sの消失は、行文の意を難澁なら

しむること大なればなり。從ひて、そは保存せられぬ。然るに、語序は次第に整頓するかたに進み、幾世紀を重ねて、拉丁語はローマンス語に遷りし後、おなじ傾向の再び襲ふや、もはや、抵抗するものなく、語尾のsは消滅せり。即ち、この現象は伊太利語と、ルーマニヤ語とに於て、いちはやく起りしかど、佛語にては、中世の末に至りて初めて行はれ、或る場合には、s今もなほ生存せるをきく。さはいへど、西班牙語のごときは、この十九世紀の終りに於て、失せはじめたるなり。

吾人は既に第一問に答へたり。次に、第二問も亦疑ふに由なし。問題に云く、語序の自由なるは、言語に利益なりや、即ち、語序の自由なるより嚴肅なるに移りたるは退歩なりや、進歩なりや、其得失如何。

文章家が語序を重んずることは、何人も知る所なり。されど語序は個人の文章におけると同く、國民の語法一般に於ても緊要なりとす。シルレル云く、「他の大家はみな其言を以て知らるれど文章の大家は賢き沈默によりて著はる」と。吾人は、或る事柄を言表はすに方りて、拙き、煩はしき手段を用ゐ、さては同事を再三繰返さずんは止まざる諸國語よりも、寧ろ「賢き沈默」を以て終る國語に與みせん哉。冗長繁雜なる曲折及び贅澤極まる呼應法を用ゐるの愚なるに反して、單に一定の語序を以てするの賢なるは、識者のうなづく所ならん。試みに、丁、英兩國語の例を掲げんか。 Jens slaar Henrik. (John beats Henry.)—H. slaar J. (H. beats J.)—Slaar J. H.? (Does J. beat H.?)—Slaar H. J.? (Does H beat J.?) 思想の諸關係の差別は、一に語序による。之を漢語に於て、本章の初めに擧げたる例の如く、「之」の措きどころに由りて、意味の變化を示す便宜に比するに、いづれも怜悧なる方法ならずや。吾人は、また之を亞剌比亞の記數法の輕便、的確なるに比するを得べし。該記數法に由れば、一位、十位、百位等は數字の序次に由りて明示せられ、二三四(234)は、三二四(324)、四二三(423)又四三二(432)とは全く異なるが如し。之に反して羅馬記數法の拙劣なる、和漢記數法の冗漫なる、彼に及ばざるや遠し。〔譯者因みに曰ふ。日本の記數法を西洋流に改めたるは故福澤翁と米人某との協力による。翁の「帳合之法」參考。〕

然るに、爰に反問するものあらん、「語詞を隨意に配列し得るときは、大なる利益ならずや」と。吾人は、之に答ふるに先ちて、語序自由論者に向ひて尋ねんとするは、「秩序と無秩序と、孰れをか選むべき」の一事なり。げに、專ら言者の方よりのみ論ぜん

には、語序の自由なるは、嚴しき法則に拘束せらるるよりも、利益大なるべけれど、聽者の利害を察するに、語序の整頓は、以て對者の意を容易に理解し得るの効あり。又言者の側よりするも、只おのれの慰みに話すものならば、いざしらず、苟も我が意を他に通ぜんとする目的を以て話すうへには、語序の規定は間接の利益あること、疑を容れず。しかのみならず、語序規律を飲くときは、單語は逐一拙劣なる言ひまはしを用ゐ、いはゆる想起辭流のものを以てせざる可らざるに至らん。との點より見るも、語序の定まれるは言者にとりても便宜なり。

次に、詩人の方よりみて、語序の自由を主張するものあれど、吾人皆詩人にあらず、言語皆詩にあらざるを如何せん。又統計上より觀察するに、顚倒法、さては古代めきたる語序法を過度に用ゐたる詩人は、大家のうちには見當らざるなり。之に加ふるに、語序一定せる國語に於てすら、――少くとも吾人の知れるかぎりにては、――助辭、所相、或は文の結構など、かの拘束を和ぐるさまざまの方法備はれるがゆゑに、詩文の達人もわながち盟みを失ふほどならず。

各國みな多少特殊の禮法に從ふと同じく、多少相異る語序法を備ふれど、吾人は成立の理由を知る能はず、しかもなほ之を循奉せざる可らず。言語史家は、或る場合には其起源を說き、又遠き昔に於て「存在の理」を有したることを明かし得べし。されど、當初之を存立せしめたる事情は、今やすなはち無く、規則は只拘束と感ぜられ、吾人をして之を觀察するに由なからしむ。

上來、吾は語序定まり、曲折滅びたることを以て、言語の一進歩となししが、二三の學者は吾見解に反對せり。アーギュド・ヨハンソン Arwid Johannson の如きこれなり。氏は『言語の精確』の一篇(印歐語學雜誌、一九〇一、第一號)に於て、獨逸文中、不明瞭なるもの若干を摘出して、語形の種類乏しきため、意義通じがたくなれる由をことわりたり。爰に一例を擧げんに、Soweit die deutsche Zunge klingt und *Gott* im Himmel Lieder singt.(獨逸言葉のひびくかぎり、天つ神の歌をうたふかぎり)の文に於て、Gott は主格なるか、與格なるか曖昧なれば、本文は兩意に解せらるるを免れず。もし、格にそれぞれ特別の記號ありたらんには、文意明瞭なるべきに、語形上の區別滅びたるゆゑに、理解上損失を招ぎぬ。されば、「語形豐富なるほど、言語ますます明瞭なり」。しかのみならず、かかる不明瞭は語序法正しく行はるるをりだに、起ることあるを如

何すべき。これヨハンソンの論ずる所なり。然り、吾人は氏が擧げたるが如き缺點の例へば獨逸語中に存するを認む。さはれ、之を以て直ちに、語形の豐富と言語の明瞭とは、必ず相伴ふものなりと斷ずるは、早計の感なくんばあらず。

第一、格の豐富と文章の明晰との關係について辨明せんに、格語尾の僅少なるは實際弱點なりとは見做しがたし。何故となれば、もし果して、語形上、格の區別なきが、文意を曖昧ならしむる基ならんには、格語尾の種類獨逸語よりも一層少き英語乃至丁抹語にありては、文意の曖昧ひときは甚しかるべしと思設けらるるならん。然るに、實際かかる曖昧は、英、丁二國語よりも、獨逸語にあらはるること多かり。之に反して拉丁語を見るに、語形豐富なれども、文意曖昧なる場合少からず。Patres filios amant. と Patres filii amant. とは、兩ながら明瞭なれど、patres consules amant は、patres consules のいづれを主格とし、いづれを對格とすべきか、まぎらはし。要するに曖昧なるは、諸格の形成法の一貫せざるにあり。かかる矛盾は一切の印歐古語に於て見る所なり。煩はしけれど、拉丁より二三の例を取出てんに、domini は屬格單數にして主格複數を兼ぬれど、verbi と verva とは、二格正に分別し、verva は複數の主對兩格にわたれど、domini と dominos とは二格相違す。damino は單數の與格、奪格に通じ、domina(女性)は同く屬格、與格並に複數主格同形なり。かくの如く、諸格の形成致を一にせざるは、曲折語の常態なり。尤も、この矛盾は語形の豐富なる必然の結果にはあらねど、歴史上兩々相離れざる事實なりとす。吾人は今 Volapük (一種の世界通用語)の如き理想的言語に就て論ずるにあらねば、史上存在する曲折語においては、ヨハンソンの「語形豐富なるほど、言語ますます明瞭なり」との宣言の當らざるを知るべし。氏はまた、「吾は、固よりバントゥ語の如く、語形の饒多なるを可とするものにあらず、吾は只アリアン諸國語に見る所の豐富なる語形を眼中におけるのみ」と、辨じたれど、さらば、アリアン諸國語の孰れをか、「美の極致(イデアール)」となさんとするか。「極點(ネプルス・ウルトラ)」はいづこにあるか。八種か、七種か、六種か、さては五種の格か。これ氏の吾人に語らざりし所。

第二に、ヨハンソンのあげたる文章の語序に就いて論ぜん。他の同族諸國語にては一時普く行はれしもの、今や既に廢たりたる往古の語序にして、なほ近世の(萬)獨逸語に於て墨守せらるるものあり。就中、屬(サボール・ヴネート・クローズネー・パンヴァッツ)節(副文)に於て動詞を最後

に措くの舊慣の如きは、その最たるものとす。この舊法こそ、上例に於て、文意の不明瞭を來たしし源因なれ。されば主文（プリンシパル、センテンス）にては、かかる曖昧全く除かる。即ち Die deutsche Zunge klingt und singt Gott im Himmel Lieder. 又は、Die d. Z. klingt und Gott（主格）im Himmel Lieder（與格）. 獨逸語の語序は割合に嚴重なれど、その實、おしなべて任意に規定したる法によれり。されば、試みに獨文にて語詞の順序を聊か變更すとも、文意少しもかはることなく、只組立の不熟（バッド、グラマー）惡語法に終るのみなれど、英文の語詞の變序は、その結果往々良語法（グード、グラマー）を得るにも拘らず、文理全く原文と背馳す。さはれ、吾が意決して獨文の語序法はすべて無用にして、英文のそれすべて有用なりと云ふに非るなり。只英の語序は、獨のよりも一層切に意義の差異をあらはすの利あり、從ひて、此點に於ても、獨逸語は英語より發達の程度低きことを知るのみ。

吾人は、上にしばしば、曲折語形の構成は、統一を飲き、矛盾に富めることを述べたり。然るに、語序法に據る諸國語に於て、此法を守るや、終始一貫、決してかの曲折語に於て語尾を作るに前後撞着し、秩序を存せざること多きが如くならず。語序法の、曲折よりも便利にして且つ明晰なること、之を見て知るべし。ヨハンソンは文意の不通を避くるか、或は曲折の語尾を保存するか、孰れか一途に出てざる可らずと思惟すれど、吾を以て見れば、陳腐なる曲折の廢棄と、理義の通曉とは全く相容ることを得るものなり。即ち、吾人は、曲折を排斥したれど、而も古へ語尾を以てせしよりも、一層理會を容易にし、且つ一層簡單整齊なる新語法を發達せしめしなり。

他の反對論者は、教授ドッヂ氏 Prof. D. K. Dodge なり。氏は、くづれの修辭學書にも載せられたる「明晰（ヴイオレーション、オヴ、ヴリアーネス）の毀傷」の例なりとて、And thus the son the fervid sire address'd. の文を引きて、「主格と對格とに特別の語形を用ゐば、直ちに文意の曖昧を除くを得べし」と云へり〔近世語學誌、一八九二〕。吾は之に答へていはんとす。「げに然らん、さりながら、正序法を以てすれば、また、文意直ちに通ずるにあらずや」と。言ふまでもなく、此文章は、近英語法の紊亂なり。かかる變則語序法は、拉丁にて、對格なるべき do minum を主格に用ゐたらんをりの過失に劣らぬ過失なり。

主格と對格とに、異れる語形なきことなどを慨する人々は、こよなき明晰と、單純と自由とを兼備する一國語を造らんと考ふるに似たり。「梅が香を櫻のはな、柳の枝になぞと」おもへるなるべし。かくて常に親しく遭遇する國語に、或る欽陷ある

時は、聲もとどめあへず、「噫、もし別々の語形ありたらんには、容易にかかる短所の補はるべきに、」と叫ぶ。完全無缺なる國語を夢想するが如きは、もとこれ學問上無意義に屬す、何ぞ論ずるに足らんや。吾人が須く講究すべき問題は、他にあり。第一、實際存在する言語に於て、變遷の方針は如何。第二、此方針は進歩のかたに向へりや否や。

吾答へて云く、言語は、おしなべて、語序を語法上の目的に利用するの傾向ますます著るし。而してこれ實に進歩的傾向なり。語序は、語法としては、いと容易に、いと精巧なる手段たり、言ふ者にもたやすく、聽く者をも勞せざるが故に、直接にも進歩的なり。しかのみならず、曲折、呼應法など扱ひ難かりし古への語形をして、いよいよ無用に歸せしめ、以て言語を簡略になしたるの功あるが故に、間接にも亦進歩的なりといふべし。曲折に代ふるに、語序を以てしたるは、是れ精神上の處理が物質上の處理に勝ちたることを示すものなり。

かくて、語序は語法上の職能を得るに至りぬ。其過程いかにと尋ぬれば、諸の語法上の手段と同じく、言者のかたには、何等の思慮もなく、徐々に出てきぬ、と答ふるの外なし。聊か一定の規矩に則りて語詞を序するに慣れ來れば、主語と目的とを分ち、又名詞と形容詞との連續を示すに、常ては語法上第一義たりし語尾、さては疑問をあらはす主なる手段なりし音調法などは、次第に主位より從位に下り、終には、殆んど全く無用に歸するに至りぬ。されば、語法發達の階段は、(第一)毫も語序に關係なく、音韻といふ物質的道具――語尾――によりて表はさるゝ時代、(第二)上と同じ道具を用ゐつつ、兼ねて、一定したる語序によりて表はさるる時代、(第三)元の道具を棄てて、語序にのみよりて表はさるる時代の三あり。

다5p-60

802.
Y592s

076593-000-3

802-Y592s

イエスペルセン氏言語進歩論

新村 出／述

[M34?]

DAA-0002